

3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード(M)9.0もの巨大地震が発生した。その直後には地震に伴い、大津波や火災が多発。多くの尊い命、幸せな生活を一瞬にして飲み込んでしまった。

緊急特集

災害に向き合う人

今、私たちにできること—

東北地方太平洋沖地震

写真提供 高遊原南消防本部

東日本大震災は、想像を絶する揺れと、それに伴う巨大な津波を引き起こし、多くの尊い生命や財産を一瞬にして奪い去ってしまいました。被災地では、今もなお続く余震や不自由な避難所生活、また福島第一原子力発電所事故による放射能汚染など目に見えない敵と戦い続けています。

国難とも言えるこの非常事態に、3月14日、町では緊急支援本部を設置。3月の定例会では、義援金100万円の補正予算を全会一致で可決し、町を挙げて被災地を支援していくことを決定しました。

益城町での支援活動

○被災地支援

- ・義援金箱の設置(4月14日現在5,758,944円)
- ・支援物資の受け付け
- 被災された方の受け入れ調査
- ・空き家・空き部屋の無料借用
- ・ホームステイによる子どもの受け入れ

○高遊原南消防本部緊急消防援助隊の派遣(第1次隊5人・第2次隊5人)

○人的支援

- ・給水活動支援(町職員1人)
- ・罹災証明書発行などの支援(4月26日から町職員4人を派遣。今後も随時派遣予定)

被災地に水を届けて

町水道課 工務係 かめつる まさひろ 亀鶴 雅洋技師



日本水道協会熊本県支部の要請を受け、本町から水道課の亀鶴技師が、4月7日から14日まで宮城県石巻市の給水支援にあたった。「被災地は瓦礫^{がれき}の山で、道路は水没し、満潮時には水かさが増す想像を絶する状態だった。度重なる余震に水道復旧した地域も再び断水する状態。被災地では、自らも20ℓ入ったタンクの水を持ち帰っての生活。トイレの水を流すのにさえ15ℓの水が必要。水のありがたみを痛感した」と語った。



被災地での給水活動の様子